

時の旅人

歴史の舞台へ人を誘う
第④章

天正遣欧使節

世界への扉を開いた四少年の道

伊東マンシヨ、千々石ミゲル、中浦ジュリアン、原マルチノ。
十六世紀末のヨーロッパに日本ブームを巻き起こしたと言われる四人の少年たちは、
一五八二年、わずか十三歳前後で長崎の港を出発した。八年五月月の歳月をかけた天正の旅。
ヨーロッパの人々にとって日本人の記憶は、この四少年から始まる――。

三百年間、日本史から消えていた使節の功績

一行が訪れたヨーロッパは、ルネサンス文化華やかなりし時。彼らは、スペイン王フェリペ二世やローマ教皇グレゴリウス十三世に謁見し、次の教皇の戴冠行列にも参加するなど大歓迎を受け、使節に関する出版物も多数発行された。これらの歓迎ぶりは、まさに日本が文明国として世界にデビューした歴史的な出来事といえる。

しかし、秀吉の伴天連追放令（二五八七年）により、出発時とは様変わりした政情のなかに帰国した彼らの功績は、日本ではほとんど知られぬままキリシタン禁教の波にもみ消されていった。明治の時代を迎え、

ヨーロッパを訪れた岩倉具視が、ヴェネツィアで「天友氏ヨリ遣ハセシ、使臣ヨリ送リタル書簡二枚」の存在を知ったことで、天正遣欧使節は三百年の時を経てようやく日本でも注目されることになった。

帰国後の人生いろいろ

四少年の生まれは、マンシヨは都於郡（宮崎県）、ミゲルは千々石（雲仙市）、ジュリアンは中浦（西海市）、マルチノは波佐見（波佐見町）と言われ、ともに有馬（南島原市）のキリシタン学校「セミナリヨ」で学んだ第一期生である。

布教の長旅で体を壊し長崎で病死したマンシヨ、棄教して謎の人生を歩んだミゲル、西坂の丘で殉教し

たジュリアン、国外退去を命ぜられマカオの地に眠るマルチノ、それぞれに過酷な運命が待ち受けていた。

もう一人の天正遣欧使節

使節の従者として共に海を渡った、諫早出身のコンスタンチノ・ドラードという少年の功績はあまり知られていない。彼は、印刷機と共にその技術を日本に持ち帰り、加津佐（南島原市）で日本初となる金属活字の活版印刷をおこなった。しかし、こうして芽生えた技術もまた、キリシタン弾圧によって摘み取られてしまっているのである。

日欧交流の礎を築いた使節の旅は、見事にその使命を果たした。

故郷中浦に立つジュリアン像が指さす遙か彼方には、ローマがある。

